令和6年能登半島地震



2024.1.1 PM4:10

最大震度7、そして大津波警報。
地震前に食べときゃ良かった。
赤く燃え上がる北の空とは対照的に
南の空は満天の星空であった。
雨水で頭を洗い、黒袋に排便のサバイバル生活。
支援物資は山のよう。感謝の気持ちは忘れない。
自宅は倒壊せずとも傾きあり「準半壊」再調査済
事務所は地盤破壊で移転す。「準半壊」再調査済

石川県行政書士会輪島支部　中村敏彦

被災後 20 日サバイバルな生活

被災後20日経った1月21日の日曜日。

朝5時、いつも通りに目が覚め、布団から手をのばし、テレビ、こたつの電源を入れ、ストーブの火をつけ、今日もいつも通りの片付けの一日が始まる。あちこち体が痛む。とにかく余震が恐いので、通電後、すぐに逃げられる1階の居間に妻と2人で布団を敷いて寝ている。余震が来る度に玄関へと走り出している。まだ断水状態は続いているが、通電後10日ともなると電気の有難みは既に薄らいでいる。

普段の生活はサバイバルそのものである。雨どいからの雨水を貯めた衣装ケースの水を汲み、大きなやかんで湯を沸かし、この湯を利用して頭を洗う。そして支援物資の水を無駄なく使い歯を磨く。大便は簡易式トイレの黒い袋に用を足し凝固剤を入れて外に貯めておく。朝食は紙の皿にラップをのせた上に食パン、そして紙コップで飲むインスタントコーヒー。自宅で過ごせる嬉しさを感じながらも、余震に対する不安が常にあった。

毎朝10時頃に今日も輪島市の公式LINEが届く。本日の支援物資の内容を確認。30分前に現地に行けば待ち時間が少なくすみ、1人上限（その当時）の水2リットル6本入り3箱等をもらい、別の支援物資配布所でユニクロのダウンや下着や長靴、毛布等何でももらう。さらに炊き出しの情報が入り「とん汁」をもらって帰宅し、昼食はとん汁とインスタントのごはんにすき焼きのふりかけをかけ、妻と2人で食べる。「食」はほぼ全て支援物資でまかなえる。

昼食後、午後からは、30m離れた道路をダンプが通過すると震度3程度の大きな揺れを感じることになった2階事務所でメールと行政のHP等をチェック。一区切りつけて、自宅の綺麗に手入れをしていた庭の木々の伐採。庭を有効に活用させるために決断した伐採。5年前に亡くなった母が見たら、恐らく気絶すると思われる作業である。

今日も全国から来た自衛隊や警察、自治体の職員、そしてマスコミの方々が家の前を通る。空には当初より少なくなったが、まだヘリコプターが何機も飛んでいる。これらの方々を見ると有難く涙が出てくる。必ず「ごくろうさま」と感謝を込めて声がけをする。

夕方、日が落ちると同時に作業を終え、体ふきシートで体を拭き、唯一の楽しみである夕食。今晩のメインメニューは山積みとなった支援物資から、サバ缶とやきとり缶。この時期、まだ、美味しく感じられた支援物資である。そして正月用の発泡酒。在宅避難を選んだ理由でもある。

地震後、地デジが映らず、意を決し屋根に上ってアンテナを調べてみたが原因が判らず、いつもの電気店にお願いに行くが、店の一階部分が倒壊しており、仕方なく諦め、もっぱら何度も繰り返し見たのはyoutubeで、見れなかった元旦地震直後のニュース。そして夜9時過ぎには、余震が来ないようにと、切に切に願いながら床につく。こうして被災後20日のいつものー日を終えた。

元旦、平穏な時間が突然に…

元旦、年明けと共に家族で初詣をすませ、そして正午には、明けましておめでとう、との挨拶で始まった家族での正月。今年一年の抱負等を聞きながら孫達にお年玉を渡し、腹いっぱい食べて、たらふく飲んで穏やかな正月の始まりであった。午後3時過ぎ、孫達は妻と2匹の犬の散歩に出かけた。その後、息子の友達2人と4人で飲み始める。飲む前に冷蔵庫のステーキ肉と寒ブリは出さないと妻に念を押されていた。夕方の「格付け」を見ながら家族で食べるとのこと。天気も穏やかで良い正月である。

宴も盛り上がった1月1日午後4時7分、緊急地震速報と共に震度5強の地震。大きく揺れ、ビックリはしたが、ほとんど被害らしい被害もなく、「でかかったな」と笑いながら飲み直した直後の午後4時10分、今度は、経験したことのない尋常ではない揺れに襲われた。マグニチュード7.6、最大震度7の地震。

家も身体も上下左右に大きく激しく揺れ動き、戸は外れ空中に舞い、テレビが激しく倒れ、部屋がミシミシと、くの字に曲がり、視界一面の大きな揺れに、柱にしがみつきながら、この家、確実に潰れるとの思いが走った。食器が割れるけたたましく大きな音が響く中、なんとか部屋から抜け出し2階に駆け上がり、妻と娘夫婦と孫3人そして犬2匹を引っ張り出し、どうにか外に出た。家は倒れず立ち続けていた。外に出るとサイレンが鳴り響き、まもなく大津波警報が出た。うそだろという思いを持ちながら、家族7人と犬2匹で海から離れた南の高台に向かうことにした。

あらゆる道路には亀裂が入り、多くの建物が倒壊し、高台までの唯一の橋の両側には50cm以上の段差ができていた。倒壊した家屋が道路をふさぎ、その上を泣きじゃくる孫娘を抱えながら急ぐ途中、大きな余震で前方左の家屋が目の前に倒れてきたが、咄嗟に避け、どうにか高台にたどり着いた。

多くの倒壊した家屋、隆起し陥没した地面を見て、被害のとてつもない甚大さを実感した。高台でも余震が続いていた。スマホからは、ひっきりなしに「地震です」「地震です」を繰り返している。この高台に避難した人は軽く200人は超えていた。余震が絶え間なく続くうち、日が暮れ始め、寒さが気になりだした。その後、高台下にある輪島市役所に避難することを決め、日が暮れる前になんとか輪島市役所に着いた。すごい人の数である。1階の避難所に着いたが、直ぐに津波の心配があるとのことで、3階に移動を指示された。この時、消防団に所属する息子は朝市通り付近で発生した火事に対処するため、現場に向かった。

市役所3階の暖房の入った部屋は既にいっぱいだったので、我々7人と犬2匹は暖房のない通路に陣どった。一人毛布1枚と非常食2食分そして水1本が配給された。しかし毛布1枚ではとても寒く、その夜は一睡もできなかった。

時々2階ロビーから、そして庁舎外に出て北方向の朝市通り付近の火事をぼうっと眺めていた。時間が経つごとに炎と煙が東側に移っていった。息子からは逐次、火事の状況の連絡があった。

この時、赤く燃え上がる北の空とは対照的に南の空は満天の星空であった。

余震が続く翌朝5時、まだ暗い中、意を決してスマホのライトを頼りに徒歩2分の自宅から毛布3枚を取り出してきた。避難所の犬2匹はおとなしく寝ていた。孫達の寝顔と共に安心した。妻は、口を空けて熟睡していた。

その後、夜明けを待つことなく、朝市通り付近の火事現場に一人足を運んだ。消防士もまだ活動していた。ほぼ鎮火したようだったが、まだ赤く炎が出ている箇所もあり、多数至るところから白い煙が出ていた。明るくなるにつれ、その全貌が見えるようになり、愕然とした。焼野原である。廃墟であった…。嗚咽する老人、呆然と身動きせず凝視し続ける男性…。避難所までの帰途、交差点角の大きなビルが倒壊し、多くの家屋が倒壊して道路を塞いでいる。言葉に出来ない悲惨な光景であった。そして町の中心部を流れる輪島川、この川は常に水量が多かったはずなのに、至る所の川底が見えていることに衝撃を受けた。

輪島市役所での雑魚寝の避難生活は4日間続いた。日が昇る頃に起きて、非常食を食べ、自宅と事務所の片付け、そして日没後暗くなる頃市役所に戻り、また非常食を食べて、後は寝るだけ。長い夜を過ごす。この期間、風呂にも入れず、顔も洗っていないが、限られた配給された水を使い、きっちり歯を磨く人たちも当然いるのである。避難所で体感する余震は恐怖感を軽減させてくれたが、1月5日、輪島市から市役所は今後、支援者専用となる旨説明があり、避難者は他の避難所への移動を余儀なくされたが、私たち夫婦は、電気のない自宅での在宅避難を選択した。

自宅は12日にようやく通電し、事務所の方は15日にやっと通電はしたが、水道の復旧は早くて2ケ月先という。苦難の時間はまだまだ続くようである。

何も今じゃなくても良かったのに…。

「隆起によって一変した袖ヶ浜の景色」「干上がった鴨浦の塩水プール」「曽々木の窓岩の崩落」など貴重な自然の観光資源も失われた。多くの家屋が倒壊した。多くの人が廃業を決心している。多くの人が輪島を離れていく。どうする輪島。どうなる輪島。

必ず輪島を復興させるという、熱い気持を持てるような年でもない。でもな1000年から3000年に1回というなら、何も今じゃなくてもよかったのに…。

泣いてても地震前に戻ることはない…。

1月2日。とある避難所。多くの荷物と豊富な食料品に囲まれ、大所帯の家族での会話が弾む右隣の人達。一方、床にダンボールを敷いて、その上で毛布1枚にくるまる1人だけの老婆。左隣の人。いろいろ。

多くの人が雑魚寝状態の避難所、そんな中で夜遅くまで大声で延々と話し続ける老婆達。余りにも長く続く大声に我慢できず注意したのは、私の娘であった。

この地震で多くの人が亡くなっている。その多くが倒壊した家屋の下敷きとなった圧死である。また、それ以上に多いのが倒壊した家屋から這い出して命拾いした人達である。そんな方々は「運が良かった」という言葉を口にする、そして命があって良かった、泣いてても地震前には戻ることはないと前向きであった。しかし、被災後の生活を前向きに捉えて頑張っていた方々も、二次避難所そして仮設での生活と時間が経つにつれ、物の言い方が変わってきた。奇跡的に命は助かったが、時間が経つにつれて、将来に対する不安感が強くなってきたという。心のケアは必要である。

重機の音は復旧の音。季節は変わる。

- ■2月　電気や水道もない自宅避難生活には慣れてくるが、余震には決して慣れることはなかった。
- ■3月　今年も春をつれて飛来したツバメたち。尋ねてみたかった。気が付いたのかと。
- ■4月　被災地という冠をつけられても、今年も変わりなく咲きほこる満開のさくら。
- ■5月　それぞれの想いで眺める、朝市の被災地に泳ぐ大きな鯉のぼり。
- ■6月　今年も道路に顔出す川ガニ。逃げる途中、陥没した穴にすべり落ちる。
- ■7月　水平線に落ちる夕陽が綺麗な袖ヶ浜海水浴場。隆起し変わり果てた姿に涙落とす。

私有財産については天災が原因であっても自費による復旧が原則とされていますが…。

石川県なりわい再建支援補助金Q&Aの冒頭に書かれている心地良く感じる文章である。国や県から多くの支援制度が出されている中、被災者の中には、行政に対し常に批判ばかりする方もいるが、一連の支援制度には感謝すべきなのではという強い思いがある。温泉で温かい食事を食べさせてもらい、何の文句があるのだろうか。しかし、ある業界は恵まれ過ぎなのではという声には、確かにと賛同するのである。

行政書士として被災者のために寄り添うことが、自分のために。

被災者の為に多くの支援制度があり、資金面に余裕のある人ほど、支援制度全般を熟知しており、使える補助金は全て活用しようとする方が多い。しかし、資金面に余裕のない人は、新たな借り入れは考えず、わずかな自己資金では、補助金申請額は自ずと減ってくるのが実情である。

補助金制度は身の丈にあった活用をすべきと相談者には助言している。被災前に比べ背伸びし過ぎるのは良くないと。相談されると、いつも前向きな方向で助言している自分だが、ただ自分の事については、色々と、まだ決めかねている。相談者の優柔不断さは気にかけるが、自分には、優柔不断さは許しているのである。

令和6年能登半島地震